Osaka University Knowledge Archive

Title	研究会参加記２ ： ジェンダー研究の視点から
Author(s)	林, 葉子
Citation	日本学報. 2014, 33, p. 151-152
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27047
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

研究会参加記２：ジェンダー研究の視点から

林　　葉　子

今回の研究会「グローバル冷戦と文化―広島／日本／東アジアから考える―」では、1950年代を中心とする「戦後文化運動」、とりわけ『希望（エスポワール）』と『われらの詩』の歴史的意義をめぐって、充実した議論が行われた。

私が何より興味深く思ったのは、広島の反戦平和運動における在日朝鮮人女性の存在が、重要な焦点の一つとされていたことである。本シンポジウムは、ヒロシマをめぐる文化運動を、朝鮮戦争との関わりにおいて捉えることにより、広島というローカルな場の歴史を、グローバルな冷戦史の中に位置づけようとするものであった。そして、そのような歴史の描き直しの際に、新しい歴史の中心に現れてくるのが、在日朝鮮人女性の姿なのである。川口隆行氏は、在日朝鮮人女性の姿を数々の作品の記述の中に見出し、そこでは「ジェンダーとともに民族という視点が交錯している」ことを指摘している。その視点は、今後、ヒロシマをめぐる「戦後文化運動」についての研究が深められてゆく際に、非常に重要な意味を持つことになるだろう。

また、『希望』や『われらの詩』の参加者には、女性も少なくなかったということに、私はあらためて気づかされた。鳥羽耕史氏と前述の川口氏による『希望』と『われらの詩』についての丁寧な紹介と鋭い分析により、それぞれにタイプの異なる二誌の魅力が存分に伝わってきたのであるが、私が特に魅かれたのは、そこで紹介された女性たちの声であった。コメンテーターの一人であるキアラ・コマストリ氏もまた、被爆者の生活史を描いた山代巴について紹介し、当時の文化運動・社会運動における女性の存在の重要性を、強く印象づけた。

今後の「戦後文化運動」研究に期待し、より詳しく知りたいと私が望むことは、「戦後文化運動」を担った人々が、それぞれに作品を書き、発表する過程において、その書き手のジェンダーが、具体的に、どのように作用したかという点である。たとえば、集団創作の実践の中で、女性の書き手と男性の書き手との関係は、どのようなものであったのか？それは、男性の指導／女性の師事といった関係か、あるいは、もっと別の、女性も強い主体性を発揮しうるような関係性でありえたのかどうか？　そして、個々の作品の中で「女らしさ」や「男らしさ」は、どのように表現されたのか？――こうした問いは「反戦平和」

の内容そのものにも、直接的に関係のある問題だと考えられる。なぜなら「女らしさ」や「母性」のイメージは「平和」論と親和性が高く、それらのイメージが「平和」をめぐる議論の中でしばしば戦略的に利用されてきたことが、女性史の数多くの事例において、重要な論点とされ続けてきたからである。

また、「女性」が一枚岩ではなく、民族や世代や階層などの違いから、それぞれに大きく異なる経験をしているという事実が、ヒロシマをめぐる創作活動にどのような影響を及ぼしたのかという点についても、より詳細な調査や分析が行われることを期待したい。性格の異なる『希望』と『われらの詩』とが、今回、同じ場で論じられたことの意義は、まさにそのようなテーマへの関心を引き起こすことにあったとも思われるが、研究会の限られた時間の中では、論じ尽くされなかった事柄も残されており、若干、消化不良の観がある。実際、シンポジウムは本来の終了時刻を過ぎても議論が尽きず、延長してもなお時間が足らず、次の機会へと繰り越されるような形で終了したのである。

本研究会について特筆すべきことは、そのような会場の熱気である。本研究会は、戦後文化運動合同研究会（第７回）の一部（セッション３）を共催とするかたちで行われたのであるが、この研究会が行われた二日間ともに、ジェンダーや民族を問題化する場にふさわしく、若い女性の研究者や留学生の活躍が目立った。韓国からの留学生である徐潤雅氏は、コメンテーターとして、聖公会大学東アジア研究所の研究成果である『冷戦アジアの文化風景１：1940～50年代』（現実文化研究、2008年、韓国語）の内容についても、『希望』や『われらの詩』をめぐる議論に引きつけながら幅広く紹介した。前述のキアラ・コマストリ氏は、イタリアからの留学生として、イタリアと日本の戦後史の相違に言及した。そして、質疑応答の時間にも、特に韓国出身の女性研究者による鋭いコメントが、議論を牽引していた。そのように、「グローバル冷戦」を論じるこの研究会の場そのものが、他国へと開かれたものになっていたことが、全体の活気を生み出す源となっていたように思われる。

宇野田尚哉氏の企画により、昨年度の「日本学方法論の会」を引き継ぐかたちで大きく展開した今回の研究会が、今後も、さらなる次のテーマへと深化してゆくことを期待したい。

（はやし　ようこ　大阪大学大学院文学研究科助教）